

---

# 魅せる風にご用心！

imaiwa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魅せる風にご用心！

### 【Nコード】

N3682F

### 【作者名】

i m a i w a

### 【あらすじ】

他人と違う力を生まれ持つ女子高生の沙耶。その力故に……

## 第一話、別に？

知らないほうが良い事は、この世の中にはいくらかでもある。

だけど、知ってて得する事はその100倍くらいあって、私はその両方をほんの少し掬い取れる。

この細腕に、この小さな手にほんの少しね……

「ぼーとしちゃって、どうしたの沙耶？」

「別に……」

今日は湿度が高いせいか、はたまた、生理になってしまっているからか、頭がぼーつとしていた。同じ高校の友達、佐山真由美、いつも連れ歩く親友であり、幼馴染だ。

あ……ヤバイ。

歩道を今、真由美が左側に私は右側に陣取り並んで歩いている。とても狭い歩道だ。

でも、この配置を代えてあげる事にした。突然制服の裾を引張られ、真由美がきよとした顔で私を見ている。真由美を右側に移し、私は左側に移動した。これでいいのだ。

バシャ……

「あー足濡れた」

「ああ、ごめんよ！」

豆腐屋のおじさんが、水巻をしようとした際に、通りがかりの私に気づかずに水を浴びせてきた。当然私の靴下、靴、スカートまで濡れました。

腹は立ちますけど、許します。分かっていたから。

「気にしないで、おじさん、直ぐ乾くから」

「本当にごめんよ」

「気をつけてよね、おじさん！」

真由美は怒っていた。うん、本来彼女が怒るべきだから、存分に怒りなさい。

だって、今の水はあなたが浴びるはずだったんだから……

おじさんは、薄い髪の後頭部に手をあてて、何回も罰が悪そうに謝っていた。

振り向いてみる。まだ謝っている……ふ……まだ、ましな方ね。良い人の部類だわ。

#

「またね」

この交差点で真由美と帰路が分かれる。私は手を振り真由美に笑顔で、再度会うことを誓う。またねって言うのは、そういう事なのだ。だから、どうしたって事は無いけど、人間の縁というもの

は、こうして繋がっていくのだと常々思っている。ハハ、私って哲学っぽい？

「おかえり」

「ただいま」

母雅恵と挨拶を交わした。母にして天敵、油断のできない相手だ。なぜなら……

「テスト返って来たんでしょ？ 見せて！」

「はい……」

ふー、筒抜けだった……

あんまり勉強していなかったから、もちろん成績はもう最低なのだ。だけど、母はそれほど叱責を飛ばさなかった。母もちろん、分かっていたから。一度みた面白いドラマを二度目みても感動が薄れるのと同じ事で、この場合の怒りの持続も難しい。うちの家系はね。

「お兄帰ってるんだね」

「お兄ちゃん、今日、学校休んだのよ」

「あら、まあ」

知らなかった。大抵の事は分かるんだけど、私は母ほどの力は持ち合わせていない。

家族のそれが分かるのは母だけだ。

「お兄、ずっこー！」

ドアを開け広げ、ベッドに寝ている兄啓太に向って、私は言った。どうせ仮病に決まってる。分らないけどね……女の勘、いや、この場合は妹の勘かな……

「ゴホゲホ……沙耶……うるせーよ、ゴホ」

熱で火照った赤い顔で苦しそうに咳き込んでいる。外れたか……山勘はずれ、ちよつと悔しい。それにしても、かわいそうに……ま、普段仮病使いすぎてる罰かもね。ここまで言っちゃ悪いが、反省。私は反省ついでに、兄にリンゴをむいてあげる事を約束して、部屋を出たけど……

あーーヤバイ……また私の心の中に置かれた、テレビに映像が映りこんだ。

どうしよう、リンゴ、母に頼もう、ごめんよ、お兄ちゃん。

私は台所に足早に向うと、母にリンゴを兄に持っていつてやる事を頼もうと。したら、既にリンゴは赤い皮をそぎ落とされ、4つに分けられ皿に乗っていた。微笑むだけに止める。母も微笑む。いや、それどころじゃない！

「ちよつと行つて来ます〜！」

「行つてらっしゃ〜い」

帰ったばかりだって言うのに、また学校行かなきゃならないなんて〜！

私は半べそ掻いて、学校へ向けて勇み足で走る。

#

「どうした？ 沢渡」

「先生……」

私は肩で息をしながら、職員室へ駆け込んだ。いやもうね、焦ったよ。

「今日提出した私のノート見せてください」

「は？ ノート？ 英語の課題のか」

猿田先生はちょうど、課題の採点をしていたところらしい。テーブルに山積みになったノートが積み重なっていた。私はひやひやしながら、自分のノートを探し始めた猿田の手に注意していた。そして

「あつたぞ……」

「貸して下さい！」

悪いけど、引っ手繰らせてもらいました。背中を先生に向けて、ノートの間を必死に探ると、やはりありました。

危なかった……これは持ち帰ります。

「先生はいノート」

「どうしたんだ？」

「いえ、お金挟んだままだったんで」

「馬鹿な奴だなあ、危うく使っちゃまうだろ？　ハハハ」

いやゝ、それはまずいでしょゝ、先生冗談になってない……  
でも、嘘だからいいよ。さて、帰りますか。

## 第二話、願望成就！？

私は一寸先の未来をイメージとして捉える力を生まれた時から持っていた。簡単に言えば、予知能力を私は持っている。

私の予知は幅が狭い。せいぜい30分先（これもムラがあるけど）の自分に降りかかる何か、自分と縁のある家族以外のそれしか知ることはできない。

人の運命は変えることが出来ないと、したり顔で述べる人が世の中にはいる。それが本当かどうかは分からない。だけど、私は実際変えられるか試した事が何度もある。

確かに無理みたい。例えば、さっきの真由美の時だって、真由美が水しぶきをかからずに済む事は絶対できない。あらかじめその事を彼女に話したとしても、絶対水にかかる運命にあるのだ。少し遅れて、全く違う場所で、全く違う方法で、水をかぶっていただろう。だけど、一つだけ運命を変える方法を私は知っている。それはつまり……

「真由美、どけ！」

「えーなになに」

登校途中、二人で歩いていると、地面に鈍く光るものを見つけた。それは1000円玉だ。本来これは真由美が拾うものだ。だけど、私が『身代わり』になる事で彼女に代わって

「ラッキー1000円見つけ！」

「はやく、私も見つけてたのに……」

「早い者勝ち」

得る事ができた。言わば、彼女に降りかかるはずだった小さな幸運を、私が予知で知ることにより、身代わりとなつて運命を変えたのだ。

真由美は負けず嫌いな所があるから、とっても悔しそうな顔をしていた。

ふふふ、ギブアンドテイクなのだよ。私は不幸の身代わりを受け持った代わりに、小さな幸運をあなたから、せしめただけなんだ。

教室の中は騒がしい。あんなたち、人生長いんだから、授業の合間の短い時間くらい、大人しくしなさいよ      とか思っている間にも、騒がしいのが来たよ……

「沙耶、なにつまんなさそうに、椅子座ってんだよ」

「別に？」

「はあ、君は相変わらず、荒んでますね」

この男子は中学校時代から知ってる笠間弘樹。何故か私と同じ高校にやってきてごちゃごちゃと話しかけてくる。実は彼に告白をされた事がある。私はきっぱり断った。だけど、しつこいのだ。頑張るんだ。諦めないんです。この高校にも私を追って入学したと断言されました。

ここまで来ると、ストーカー？ そうかもしれない、だけど、それなりに彼の良いところも分かってきていて、友達として接してはい

ます。飽くまで友達までだけど。

さてと、授業が始る。先生様がお出でになられたよ。

「だからよお、俺言ってやっただよ、一昨日きやがれってな……」

英語の先生がなぜか、自分の過去話を熱く語り始めた。授業には関係無いんだけど、お笑いみたいな面白いネタフリを永延と生徒に聞かせていた。

あんた、脱線しすぎだよっと思うんだけど、これが楽しい。

周りのみんなも笑ってる、お日様も笑ってる、じゃないんだけど、大ウケ中。

あの人も……笑ってる……私の恋心をがちり掴むあの人もね

……

私は笑いながらも、あの人の横顔を、ちらちら視界にいれていた。もう……心は決めている。実行に移すのみなのだよ……

昼食時間。

「沙耶、今日、どうするの？」

「うう、ちよっと待って……まだ気合が入らない」

私はこの後に及んで、尻込みしていた。腰が重いのだ。尻が重いのだ。尻軽女が羨ましい。

だけど、私は本気なんだ。神谷慶介に惚れています。ぞっこんです。だから

一度深呼吸して、上から見下ろす真由美をみて、気合をこめた額きを披露した。

真由美は息を呑んだ。どうやら、同じくらい緊張してくれているらしい。

神谷君が、一人で教室出た、行くしかない！

私はさっと立ち上がると、疾風となつて彼の後を追った。

しかし もう一人同じような人がいたのだ。同じタイミングを見計らつてたらしい。

これは……イメージが……ヤバイ。

私は彼に後ろから声をかけるのを一瞬躊躇った。

だけど 、真由美と同じく、悪いけど、身代わりに……「ごめん！ これだけは譲れないの！

「神谷君、ちょっと話があるんだけど……」

階段を下りる前に彼を捕まえた。私が声をかけた後、踵を返す女子が一人いた。

須川祥子、同じクラスの女の子で、あまり目立たない娘なんだけど、知らなかった。

まさか……、同じ人を好きになっていたなんて、この直前まで私は知ることができず、咄嗟の判断で身代わりを決意し、彼女から奪ってしまった。

「屋上に行かない？」

神谷君が優しく私を見つめた。頬が熱くなるのを感じる。私は静かに彼の手の辺りを眺めて頷いた。

#

「でも、本当に俺なんかでいいの？」

「はい……」

屋上のフェンス際に手を掛けながら、彼も少し緊張しているのだろ  
うか、震えている気が。

いや、この振るえは私ですか！？ ああ、恥ずかしい、止まっ  
てよ。

もう爆発しそうです。このまま脳が点滅して、ロケットのように  
空に飛び立ってもおかしくなくらい。それくらいもう恥ずかしい  
だけ……

「じゃ、付き合ってみますか」

「はい！」

なんか、成立してしまっただけです。私の交渉は成功してしまっ  
た。もうこれは疑いようもなく、カップル誕生の瞬間でした。心臓が早  
鐘を打っているけど、足も力が入らないくらい震えているけど、願  
望成就したんです。もう死んでもいいかも。

### 第三話、緊張するねい！

#### 放課後

私たちは学校から二人で帰る事になる。

「沢渡……でいいかな？　さんつけたほうがいいだろうか？」

「沙耶でいいです……」

「えーと……じゃあ……沙耶ちゃん」

降って湧いたというか、押しかけたといった方がいいのだろうか。とにかく、私はもう神谷君の彼女……？　ちょっとずーずーしーかな。

とにかく付き合う事になったわけで、まず初めにお互いの呼び名を決めているんだけど。

苗字で呼ばれるのはなんか嫌だし、呼び捨ては構わないんだけど、そうなると、神谷君が呼びづらいようで、中間の沙耶ちゃんて治まりがついたようです。それでも神谷君は頬を指で摩りながら、少し苦笑しております。私はまだ　苗字君付けでいきます。

……  
まだ彼を碎けた呼び方するのは、恐れ多いというか、恥ずかしい  
……  
神谷君の横で今、ガッチンガッチンになって、ぎこちない二足歩  
行をしているような女の子なので。

「……………」

何をしゃべっていいんでしょうか？ 取りあえず、何にも浮かばないんです。

「沙耶ちゃん、何で俺なんかと？」

「えーっと、色々です……」

何でと言われると色々あるんですが、やはりあの時の事がきっかけでしょうか。

一つあげるなら、優しさ。神谷君のよく分からない優しさに私は惹かれた。いや、ベタ恋なんです。

そう……あの時から

くく

昼休み、私は真由美と学校のパン売り場へ足を運んだ。供給に対する需要の圧倒的多さに、パン売り場は一つとくれば、そこは戦場と化します。

「真由美、パン買えたか？」

「うん、焼きソバパン、ウィンナーパン、カレーパン」

「おめー買いすぎなんだよ！」

真由美はとっても手際よく迅速にパンを購入していきました。たぶん、普段から特売ものや、バーゲンの品を買いあさる彼女からすれば、それは造作も無いことのようにです。

しかし 私は普段は手作りの弁当を持ってくる地味な娘でして、

この日は朝から頭痛が起きてしまい、仕方なく弁当製造を断念。まだ少し頭の端が痛む中、このうざったい戦場へやってきたんです。この喧騒というか雑踏は私には荷が重過ぎました。だけど、なんとか1000円札を強引におばちゃんにねじ込み、代わりにお釣りとヤキソバパンを確保したんです。

ここまででは良かった……とても順調だった。だけど　この戦場から離れてから、財布につり銭をしまうべきだったんです。

だけど、時既に遅し、お金を財布に入れる際、ヤキソバパンが……私の小脇に抱えたヤキソバパンが……すると抜け落ち、死地へと転がり込んでいったんです。思わず私は悲鳴を上げました。

「ヤキソバパンが……！」

そう私のヤキソバパンは人々の足に踏みしかかれ、あっという間に、粉々にされていました。

絹を裂くような悲鳴は周りの喧騒を一時的に沈静させました。一斉に私の方を一瞥した後、足元を見てあちゃ……って顔をした皆様。しかし、また何事も無かったように、彼らはパンをどんどん懷に抱いていきます。そして、やっと私が潰れたヤキソバパンに見切りをつけて、列に並んだ頃には

「本日売り切れ……ごめんね……、また今度よろしくね……」

一斉にため息が辺りから漏れました。同じようにパンを得ることが出来なかった不幸な人々が、蜘蛛の子散らしたように猫背で帰っていきます。

私の横にいる真由美が、パンを頬張りながら、慰め顔で私の肩を叩くんです。

思わず

「ヤキソバパン一個よこせー」

っと大きな声で真由美に怒鳴ってしまいました。しかし、彼女の今かじっているヤキソバパンが最後のようで、それももう残すところ3分の1というところでしょうか？

私のでんぱった鬼の形相を見て、怯えた顔でその食べかけのパンを千切って私に渡そうとするんですが……無言で首を振りました。涎ついてたんで……

それになんだか、怒鳴って悪かったという後味の悪さもあり、取り合えず、真由美に謝ろうとしたんです。

だけどそんな時、私の背中から怪訝な声が聞こえてきたんです。

「そこの子！ 女の子なんだから、パンの一つや二つでハシタナイ声出すもんじゃないよ、これ上げるから」

と、大きな声を私に浴びせてきたのが、同じクラスの神谷君だったんです。

彼は怒声を浴びせた割りには、穏やかな顔つきで口をもぐもぐ動かしながら、様々なパン合計8個を両手に抱えていました。

そして何食わぬ顔で、はいっと言ってその中から、ヤキソバパンを私に手渡してきました。

私の手の平に転がり込んだヤキソバパン。温かい……それにとっても良い匂いが 私の鼻を攪りました。そのぬくもりが匂いが……手の平と嗅覚を通じて、私に安らぎをもたらしました。しばらく恍惚として、悦に浸ってしまいました。

だけど 直ぐにお礼を言わないと、と我に返り、振り向くと彼はいませんでした。

でもこの時、ジーンとパン以外の温もりが私を包んでいたんです。この時から彼の事を意識しはじめたんだと思います。

勉強は良くできるらしいし、スポーツも中の上くらいだと聞きました。（情報提供者 真由美） だけど、そんな上辺なんかどうでも良かった。彼の行動の節々に見え隠れする優しさ、そして、真剣さ、これは平凡な日常を通して十分伝わってきました。しかも、二枚目。

だんだん彼に本気で恋心を抱くようになり、

ついに     このような晴れ舞台に立っている訳です。

「あのさ、近くにケーキがうまい喫茶店あるんだよ、行ってみる？」

「はい……」

私は静かな声で彼に言いました。間違っても大声なんか発していません。

繁华街を並んで歩く。まさにカップル……彼は背が高いんです。私かというと161CM、体重？、肩までのストレートな黒髪。丸顔。バストそれなり、ウエストきゅっとしまつて     とか私は別にいいんです。とにかく、そんな私と身長差があるわけだし、歩幅も違う訳です。

だけど、私に気を遣って、足並みを揃えてくれます。離れすぎず、くつつきすぎないくらいの距離を保ちながら……

「沙耶ちゃんは、何か部活やってんの？」

「帰宅部です」

「おお、同じだね、ハハハ」

帰宅部も一緒だって地味なカップルです。だけど、気にしませ  
ん。部活なんて、高校になってからやるようなもんじゃないと思う  
からです。中学校までで十分です。

ああそれと、今心の声はこんなに畏まっているけど、これは神谷  
君が隣にいるからです。てか、めっちゃ緊張してます！

## 第四話、真実。（前書き）

完結編です。

#### 第四話、真実。

「ここだよ」

「はい」

喫茶店に着きました。白い壁が際立つお洒落な喫茶店と申しましようか。

まあ、どこでもいいんです。神谷君と一緒にならそこがコンビニでも文句ありません。

「ただいま、母さん」

「あら、慶介、彼女？」

「うん、沢渡沙耶さんだよ、あ、こちら母だよ、沙耶ちゃん」

「は、はじめまして、さ、沢辺沢です……」

「よろしくね」

喫茶店に入るなり、神谷君の母と自己紹介、ていうか、なぜに！？聞いてなかった……まさか喫茶店してるなんて。思わず口がもつれて偽名を使ってしまったよ。お辞儀を丁寧になると、神谷君の母上は私たちを席に誘導してくれた。

窓際の席でございます。大変眺めがよろしくて、ホホホ。想定外の展開に私は頭が空転してしまっていた。

「シヨ、シヨートケーキなど」

「俺チヨコとクルミのケーキお願い」

「お飲み物は？」

「俺ホットコーヒー、沙耶ちゃんは？」

「ホ、ホットミルクティーで」

注文聞きにきた神谷君の母上が私に優しく微笑んだ。

何を口走ったか分からないけど、こういうときは大抵望みの物が口から漏れる。

どんなに頭が白く塗りつぶされようと、私の食欲という本能は正しく働くようになっていた。

しかし、どうしよう、落ち着かないよ……神谷君だけならともかく、母上までいるなんて。

#

「沙耶ちゃん、早いな〜食べるの」

はうあ！ 緊張と焦りから、素の速さでケーキを口の中へ掻き込んでいた。

もう皿の上には何も乗っていない。神谷君の皿に視線を投げかけると、まだ半分ほど残っている。なんと、マナーの無さ。こんなことになるはずじゃ……

この緊張し〜の性格なんとかしないと、破滅の一途を辿っていくに違いない。

そつだ、せつかくこの喫茶店に誘ってもらって楽しい時間を過ごすよう仕向けてくれたんだから、なんか話さないとね。食べてばかりですつと無言だったに違いないから。

「神谷君のケーキおいしそうだね」

ああ、何言ってるんだろ私。

「ん？ これちょっと食べてみたいの？」

「うん」

確かに美味しそうでした。欲望が口を支配してるとしか思えない。

「おいしい！」

本当に美味しいね、チョコクリームがまったりとして、味わい深くって……って違う！

もう破滅だ、家に帰りたい。神谷君の眼にどれだけずーずーしー女として映ってるんだろう。死にたくなる。

「だろう！ 美味しいだろ！ このケーキ母の自慢なんだよ。やっぱりな、うんうん」

神谷君は何故か上機嫌だった。

「さて、でようか」

「はい」

「ありがとうございました〜また来てね、沙耶ちゃん〜」

最後は下の名前で呼んでもらって、笑顔で見送られる。神谷君も楽しそう。

ま、良い方に転んだということですか。

「沙耶ちゃんがあのかーき美味しいって言ってるの教えたら、母さん喜んでたよ」

実際美味しかったので、ああなんか、これでいいんだろうか。たぶん良いのでしょう……

神谷君と途中で別れた。笑顔でまた明日な〜って言われた。

取りあえず、嫌われてはいないようです。最初のデートで心象悪くして、次から冷ややかな関係になるって事は良くある事だと思う。それを考えると最初のデートはうまくいったようだ。あまり記憶に残っていませんけど。

まあ、夕食食べに行こう。

「お母さん、今日の夕食何〜？」

「カレーライスよ、食べれそう？ ケーキ食べてきたんでしょ」

「大丈夫よ」

「そうみたいね」

この力、特に母程の力をもつことって、人生楽しいんだろうか？  
こんなに筒抜けだと、大変だろうとは思っ。良いことばかりが起

きるわけじゃない。

千変万化、多種多様な出来事が重なり合って人生は構築される。そんな事を人より先に知り、過去に起こったことも掘り返し見てしまふ。

母は想像を絶する世界に身を投じているんだ。私はせいぜい30分前後の未来過去を知ることができる。これくらいが私の許容する限界かと思う。

その夜未来からの手紙を受け取る。

私はそれを見た後、すぐに風呂場から飛び出ると、タオルを巻いて自室に駆け込んだ。

そして、私服に着替えて、髪が乾かない内に家を飛び出した。

「どうしたの？」

「なんか事故らしい」

息を切りながら到着すると、辺りは騒がしく人が行き交っていた。野次馬や近所の人たちが立ち止まり、哀れむような目で誰かを眺めていた。

私はその姿を分け入ってみる事をしなかった。

イメージで既に見てしまっていたから。

私は神谷君を祥子ちゃんから身代わりとなって奪い取った。

しかし、人の運命を身代わりとして受け継ぐという事は、代わりにその人の運命を自分が受け持つという事である。

それは楽しい事もあるだろうし、悲しい事もあるだろう。その全てを享受する事を覚悟して、身代わりになる事を選ぶ。実際、私はこの重々しい真実を分かっていたのだろうか？

今、その答えは浮ばない。

赤い光が騒がしいサイレンの音と共に周りに投げかけられる。  
少なくとも、こんなイメージを目にするために、身代わりを選んだわけじゃなかったはずだった……

E  
N  
D

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3682f/>

---

魅せる風にご用心！

2010年10月9日21時28分発行